

秋深し・・・近頃感じた色んな話

足の外科手術を受けた関係で、退院後長期にわたって電車で通院リハビリを受けることになった。電車に乗ると優先席の世話になることも少なくないが、この席に座ってみると色々見えてくるものがある。

若くて身体的に問題を抱えているとは思えない人が平気で座っているし、その前に妊婦が立っていてもまったく気かけずにスマホ操作に専心している人がある。外見から高齢と思われる人が人垣をかき分けて乗り込んできて「既得権益」とばかりに座りに来るが、その後から松葉杖の人が歩いてくることは気にかけてはいない。

中国人と思われる海外からおいでの人、余白の多い優先席にどかんと座り、巨大な旅行かばんを通路に並べると、もう他の人は立ち入ることもできない。

ふと見上げると、車内の広告にこんなものがあった。



「ヘルプマークを付けている人がいたら、席を譲る・困っていたら声をかけるなどのご協力をお願いします」というような主旨が書かれていた。義足や人工関節を着けている方、内部障害や難病の方、妊娠初期の方など外見では判断できないが援助や支援を必要としている方への援助がしやすい仕組みとして東京都が考案し全国に広がりつつあるものらしい。公的にはあまり知らされておらず、もし有効なものならばもっと積極的に広めていくべきではないかと感じた。

しかし、詳細を調べてみたら「2020 年オリンピック・パラリンピック」を意識して作られたものらしいこともわかり、複雑な心境ではあるが・・・。

ともあれ、自分が世の中のお世話になる立場になって初めて気がついたことなので、大事に実行に移していきたいと思っている。優先席をめぐる、色々感ずることの多い年になった。

登山に、旅に、日常生活に、カメラは欠かせぬものだった。多くの写真を撮っている内に、美しい写真が撮りたくて、昭和50年代頃からリバーサルフィルムを使い、その大半はスライドとしてスクリーンに写して楽しんできた。

ネガにせよポジにせよ、経年変化で退色や損傷が始まっていたので、ネガフィルムについては 9 年前から少しずつスキャナーで読み取ってデジタル化保存する作業を進めてきた。この夏、ネガフィルムのデジタル化保存作業を終了して、概算600本のフィルムを廃棄した。

リバーサルフィルム(スライドのコマ)は、フィルムにして約60本あり、一本ずつプラスチックケースに収納されているので損傷の度合いは低いだろうと思って後回しにしてきた。

9月に入ってから、スライドのコマのデジタル化保存作業に着手してみたら、やはり退色が始まっていた。



美しさを求めたリバーサルフィルムも、時の流れには抗えず・・・。

十分な光量の中で撮られたシャープな出来栄の写真は退色や損傷が少ないが、暗いところで苦労して撮ったような写真は輪郭がぼけたり退色したりしていた。

主にフジ・さくら・コダックなどのフィルムを使用してきたが、コダックが一番退色が少ないような気がした。

一枚一枚のスライドのコマには、それを写したときの記憶が収められており、スキャナーから読み取った画像をパソコン上で眺めていると「その時代」に

いるような気分になるから不思議だ。約二ヶ月を要して作業を終了し、「フィルムに撮る写真」の時代が我が家からも消え去ることになった。保存したCDを手にして感傷にひたりながら、次のゴミ収集日に合わせて廃棄物の分別を進めた。

NHKのテレビニュースを見ていて気がついた。BSニュースではアナウンサーが(女性の日が多い)一人で、淡々とことを運んでいて、手際よくわかりやすいニュース報道だった。

地上デジタルのNHKのニュースは、3人が出演するワイドショーのようなニュース。途中で内輪の雑談も入り、テレビの前で見ている人とはまったくかけ離れた世界になっている感じがした。たかがニュース報道だけのために「何故三人がかり」でやらなければならないのだろうか？

民放各社のニュースに至っては、「面白そうなネタ」を探してきては必要以上に掘り下げて「芸能スキャンダル」的な取り扱いが多く、「ニュースを見る」という感覚からは遠く離れたものになっている。

某テレビ局の特集番組と称する番組を見ていたら、メインになるキャスターはお笑い芸人だった。お笑い芸人がお笑い番組以外に登場するのは悪いとは思わないが、内容次第だろうと思う。

「へーっ」「うそや〜」「感動した〜」の連発で、騒々しいばかりの番組だった。挙げ句の果てが、とある出来事報道の中で、「XXXXせざる おえない」と自信たっぷりにコメントしていたのには呆れかえり、テレビを消した。

昭和 40~50 年代はマッチの時代だった。居酒屋でもスナックでも、旅館でもホテルでも、はたまた町中の商店でさえ「その店のマッチ」を用意していた。一度来たお客さんをリピーターにするための宣伝道具としてマッチは有効なものだった。

台所の道具が竈(かまど)だった「焚き火の時代」から「ガスの時代」に変わり、さらに「ライターの時代」になり、「着火装置内蔵コンロの時代」になってしまった。

一方では、喫煙道具としてのマッチは、ライターに取って代わられた上に、「喫煙人口減少」の波にも襲われてしまい、マッチの出番は片隅に追いやられた感がある。

そんな時代の変遷を経て、様々なお店でマッチをもらうことはなくなってしまい、前述のフィルム同様に「科学技術の発達」による「生活様式の変化」の荒波の中に消えていく物のひとつに数えられるようになった。



マッチの全盛時代には、様々な趣向をこらしたデザインのマッチが世に飛び交い、マッチ欲しさからその店へ出向くことさえあったように思う。手に入れたマッチの外箱をきれいに解体して、ノートに貼り付けている内に、ノートは4冊になっていたが、変色や虫食いが始まってきたので、廃棄することにした。

ただ捨てるだけではつまらない、スキャナーで読み取って画像として保存することにした。

ひとつひとつのマッチの裏には、ひとつひとつの出来事や思い出が潜んでいるものもあり、それを思い起こ

してみるだけでも懐かしく楽しい時間ができた。

以上